FORUM Vol.12

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第12号

CONTENTS

FDセミナー（2008年度第2回）報告 ---- 2

コラム ---- 3
知的共同体としての大学の教育力
高等教育開発センター主任　高橋 哲也

JCSS結果報告(3) ---- 4

高等教育開発センター ---- 6
2008年度活動報告

編集後記 ---- 8

大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

REPORT

FDセミナー（2008年度第2回）報告

今年度第2回FDセミナーは,12月18日,本学の髙橋幸治先生（総合教育研究機構）,川戸圓先生（人間社会学部）を講師として,「心理的問題に直面している学生への向き合い方」の演題で開催されました。

講師のお二人は,平成18年6月に開設された大阪府立大学心理臨床センターのスタッフとして,人間社会学研究科人間科学専攻臨床心理学分野の実習教育指導を担当するとともに,府民を対象とした心の問題に関わる援助活動を通して,地域への貢献も果たしておられます。今回のセミナーでは,「急に怒り出す」,「授業内容とは脈絡のない質問をしてくる」,「グループでの活動ができない」といったような,われわれが対応に困るような行動をとる学生にどう向き合えばいいのか,できること・できないこと,していいこと・しない方がいいことなど,心理臨床の専門家の立場から話して頂きました。

はじめに,髙橋先生から心理臨床の専門相談機関で行われることについて,その環境や具体的なプロセス,風景構成法のことなど種々の話を含めながら,臨床指導員として関わってこられた経験をもとに紹介がありました。特に,「日常」の場から「非日常」という場を設定することの意味やその大切さ,関わり方のスタンスについて話されました。これを受けて川戸先生は,この2つの場の設定とともに,その2つの場をどうつないでいくのか,つなぎの過程やつなぎ役の存在の重要性を指摘されました。専門家でないわれわれが「日常」をどう捉えるのか,向き合うときの姿勢についての話や,「重荷に感じたとき」が専門家へつなぐきっかけであるというお話など,有意義な時間となりました。

講演のあと質疑応答があり,「がんばれと励ますこと」も必要な場面があるとか,学生指導における教員の立ち位置についての指摘など,時間いっぱい活発なやり取りが行われました。参加者のアンケートも「続けて欲しい」,「もっと掘り下げてやって欲しい」,「心の準備ができました」など大変好評でした。

（木舩）

COLUMN

知的共同体としての大学の教育力

高等教育開発センターが17年度に発足してから4年間主任を務め、このFORUMにも何度かコラムを書かせていただきましたが、主任としてコラムを書くのはこれが最後です。FORUM創刊号のコラムで、FDを「教育を良くするための組織的な取り組み」と書いたので、最後のコラムでも教育を良くするための組織の話を考えてみます。

大学は、教育基本法、学校教育法などの法律で設置の目的を定められている教育機関です。その第一の使命が教育であることは今日では共通理解が進んできたと思います。したがって、組織運営を考えるときには学生中心に考えるのは当然の流れです。学生が大学での学びを通してどのような能力を身に付けるかを設定し、それをどう評価するかというのが非常に重要な課題ですが、このことについて、大学全体、或いは部局全体といった組織での検討は進んでいないのではないでしょうか。また、学生を中心に考えれば、組織のあり方も変えていく必要があります。現状では学生の教育は教員だけが行うという認識がほとんどだと思いますが、上記のように考えると職員の役割も重要だということに気付きます。大学というコミュニティで何を学んでいくかと考えれば、学生に直接接する職員、間接的にサポートする職員は学生の成長に重要な役割を果たせますし、各職員がそういう意識を持つ必要があります。職員にとって学生の学びをサポートするのが最優先課題であるのが当然だと思うのですが、皆さんは如何でしょうか。（教員のわがままに対応するのが仕事ではありません。）こういった観点から、SD（Staff Development）が必要ですが、それはまた別の機会に。

学生を中心に考えれば、卒業させれば大学の役割が終わりではないことも明らかです。卒業後に大学で身に付けた能力が社会でどう役に立っているかを把握することも大学の責務ですし、もし、足りない部分があれば、生涯に亘って学ぶ機会を提供するのがこれからの大学だと思います。（18歳人口の減少から、経営的視点からも、生涯教育に大学が活路を見いださないといけないのは明らかです。）社会に出てからも戻ってきたい場所であるためには、大学という「社会」での経験にどのくらい価値を見いだせるかにかかってきます。そういった視点で考えると、大学コミュニティでの日常的な実践の重要性が浮かび上がります。従来、研究室での師弟関係に依存していた大学と学生の関係を組織全体（学生・教職員）でも築いていかないといけません。

大学は戦後最大の変革期にあり、社会に対して説明責任を果たすことを求められていますが、最も問われているのは組織としての教育力をどのように高めていくかだと考えています。学生の成長にどのように寄与しているかを常に問う意識を教職員が持ち、学生が自分の成長を実感できる大学でありたいと思いませんか。　（高橋）

JCSS結果報告（3）
― 能力や知識の増減に影響する進学理由

前号では、JCSS府大データを用いて、能力や知識の増減に影響する要因として、入学してからのさまざまな活動をとりあげましたが、今回は本学への進学理由について検討します。能力や知識に関する設問は前回同様「入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか」で、選択肢は「大きく増えた」「増えた」「変化なし」「減った」「大きく減った」の五択です。進学理由は「あなたが本学に進学した理由として以下の項目はどれくらい重要でしたか」を用い、選択肢は「とても重要」「少し重要」「あまり重要でない」「まったく重要でない」の四択です。今回も双方を便宜的に連続変数と見做し、進学理由の全項目を独立変数、知識や能力のそれぞれを従属変数として重回帰分析を行った結果が表1です。プラス・マイナスの符号は標準偏回帰係数の符号を示し、符号の数は有意水準（1％水準は1つ、0.5％は2つ、0.1％は3つ）を表しています。

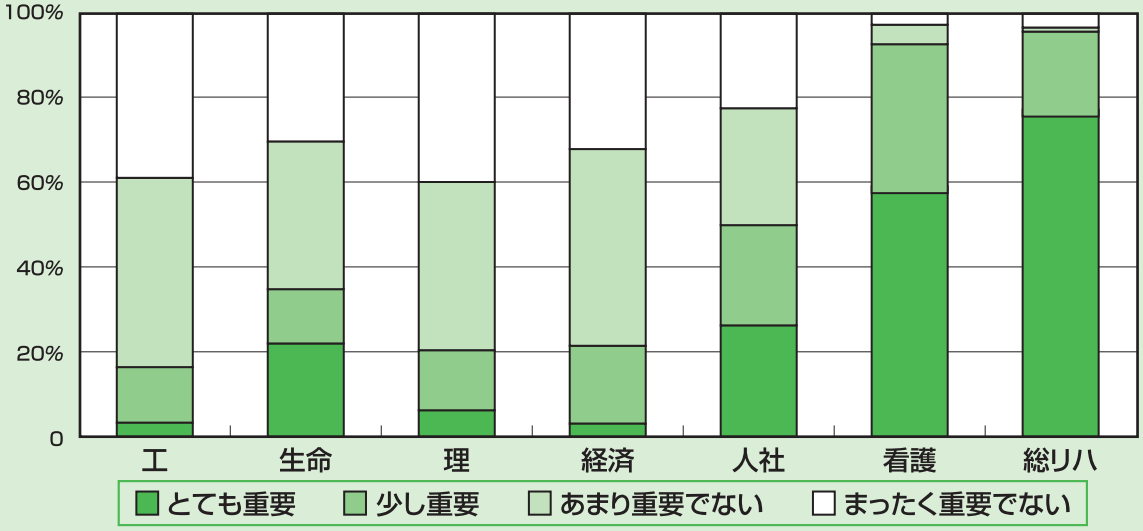
「大学で学ぶ内容に興味があったから」はほとんどの能力や知識にプラスに作用しています。より高度の知識や技術を身につけ、知的生産に従事するという大学本来の在り方からすれば、大学に進学する理由としては最も望ましいものの一つであり、入学者のそうした“期待”に応えることができているという喜ばしい結果といえます。プラスの項目が多い進学理由としては他に「学生生活を楽しんでみたかったから」が挙げられますが、「一般的な教養」「コンピュータの操作能力」を除けば、対人関係やコミュニケーションに関連した能力や知識の増進にはたらいているようです。他方、「資格をとるために必要だから」は、「地域社会が直面する問題の理解」にはプラスであるものの、「一般的な教養」「異文化の人々に関する知識」「プレゼンテーションの能力」「数理的な能力」「コンピュータの操作能力」「卒業後の進学の準備状況」「グローバルな問題の理解」にはマイナスです。「資格をとるために必要だから」に対する回答の学部別分布（図1）から推察すると、学部（卒業）段階で資格を取得して職業現場に出て行こうとする学生の多くにとっては、これらの能力や知識は資格や職業との（少なくとも直接的な）関連は薄く、資格取得のための学習が優先され、逆に「地域社会が直面する問題の理解」は（地域医療などに対する関心から）促進されるのかもしれません。「すぐに働きたくなかったから」進学したという学生はどちらかといえば少数派ですが（全体で「とても重要」＋「少し重要」30.1％、「あまり重要でない」「まったく重要でない」69.9％）、やはり進学理由として極めて消極的であるためか、能力や知識の増進にはマイナスに作用するようです。

（保田）

■ 表1　能力や知識の増減に影響する進学理由

進学理由 / 能力や知識	就職に有利だから	親の希望だったから	周りの人たちが進学を希望したから	予備校や塾で勧められたから	すぐに働きたくなかったから	大学で学ぶ内容に興味があったから	学生生活を楽しんでみたかったから	資格をとるために必要だから	より高い学歴のために必要だから
一般的な教養						+++	+++	−−−	
分析や問題解決能力						+++			
専門分野や学科の知識					−−−	+++			
批判的に考える能力						+++			
異文化の人々に関する知識						+++	++	−−−	
リーダーシップの能力					−−−		+++		
人間関係を構築する能力				++	−−−		+++		
他の人と協力して物事を遂行する能力	+++				−−−	++	+++		
異文化の人々と協力する能力							++		
地域社会が直面する問題の理解						+++		++	
国民が直面する問題の理解						+++			
文章表現の能力	+					+++			
プレゼンテーションの能力				++	−−−	++	+++	−−−	
数理的な能力								−−−	+++
コンピュータの操作能力			−			++	+++	−−−	+++
卒業後の就職の準備状況						+++			+++
卒業後の進学の準備状況	+++					+++		−−−	
時間を効果的に利用する能力	++					+++			
グローバルな問題の理解						+++		−−−	
外国語の能力			+++						

■ 図1　進学理由「資格をとるために必要だから」回答の学部別分布



高等教育開発センター
2008年度活動報告

セミナー・研修会の企画・実施

◎FDセミナー

FDセミナーを2回開催しました。第1回は、総合教育研究棟竣工記念シンポジウムとして「今、大学教育に求められるもの」をテーマに、新潟大学理事、前国際基督教大学学長・絹川正吉先生に基調講演をいただき、引き続き、「首都大学東京の取り組み」（首都大学東京基礎教育センター長・上野淳先生）、「府大におけるこれからの取り組み」をパネルディスカッションの形で展開いたしました。第2回は心理臨床センター次長・川戸圓先生、心理臨床センター指導員・髙橋幸治先生をお招きし、「心理的問題に直面している学生への向き合い方」について講演いただきました。

◎SD・FDセミナー

今年度、新たにSDに関する取り組みとして、名城大学大学教育開発センター・神保啓子さんに「FDを支えるSD」について講演いただきました。

◎FDワークショップ

昨年度に引き続き、10月にFDワークショップを開催しました。「大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計」をテーマに、参加者間による活発な討論とその発表が行われました。

◎新任教員FD研修

新しく（平成19年度、20年度）着任された教員に対して、大阪府立大学の理念や教育方針、ならびに教育体制について周知徹底をはかるため、「GPA、CAP制の活用」、「大学設置基準の改正と中教審答申」、「授業アンケートからわかってきたこと」をテーマに研修会を実施しました。

セミナー・研修会	内　　容	年 月 日
総合教育研究棟竣工記念シンポジウム（第1回FDセミナー）	テーマ:「今、大学教育に求められるもの」 基調講演「学士課程教育の理念とその実現」（新潟大学理事、前国際基督教大学学長・絹川正吉）　パネルディスカッション　「首都大学東京の取り組み」（首都大学東京基礎教育センター長・上野淳）、「府大におけるこれからの取り組み」辻川吉春（工）、大木理（生命）、村澤康友（経）、吉田敦彦（人社）、山口義久（機構）	2008/7/4
第2回FDセミナー	「心理的問題に直面している学生への向き合い方」（心理臨床センター次長・川戸圓、心理臨床センター指導員・髙橋幸治）	2008/12/18
SD・FDセミナー	「FDを支えるSD」（名城大学大学教育開発センター・神保啓子）	2008/7/23
新任教員FD研修（中百舌鳥キャンパス）	新規着任教員対象のFD研修会	2008/5/23
新任教員FD研修（羽曳野キャンパス）	新規着任教員対象のFD研修会	2008/8/22
FDワークショップ	「大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計」	2008/10/31

調査の実施

◎授業アンケートの実施と分析

今年度、前期開講の授業に関しては、全学的に2008年6月2日～8月8日に学生ポータルを通じてWeb上での授業アンケートを実施しました。また、後期開講の授業アンケートについては、2008年11月25日～2009年3月5日に、学生ポータルを通じてのWeb上での実施に加え、試験的に一部の科目についてマークシート式の質問紙方式を導入しました。アンケートの結果については、各科目の担当教員のコメントを添えて、ホームページ上で学内限定にて公開します。アンケートの分析結果の概要は、前期分については本誌第11号に掲載しました。また、後期分については次号に掲載予定です。

印刷物発行

◎センターニュース発行

昨年度に引き続き、今年度もセンターニュース『FORUM』を3回発行し、学内の全教職員に配付したほか、他大学のFD関連センターや大阪府内の高等学校にも送付しました。

◎その他

FDワークショップの報告書をまとめました。

名　　称	内　　容	発 行 月
「フォーラム」第10号	新任教員FD研修報告、総合教育研究棟竣工記念シンポジウム（第1回FDセミナー）報告、JCSS結果報告(1)など	2008/8
「フォーラム」第11号	FDワークショップ報告、授業アンケート報告、JCSS結果報告(2)など	2008/12
「フォーラム」第12号	第2回FDセミナー報告、JCSS結果報告(3)、高等教育開発センター2008年度活動報告など	2009/3
平成20年度FDワークショップ報告書	FDワークショップの報告	2009/1

所員派遣

FD関連のシンポジウム・セミナー・講演会・会議への出席、および学外への講師等の派遣を行いました。

派　遣　先	派 遣 内 容	派遣者	年月日
関西地区FD連絡協議会総会準備会合（京都大学）	会議出席	高橋	2008/4/4
関西地区FD連絡協議会設立総会（京都大学）	総会出席	奥野、高橋	2008/4/26
近畿地区大学教育研究会運営委員会（京都大学）	会議出席	山口	2008/5/10
大学教育学会　第30回（2008年）大会「大学の教育力」（目白大学・新宿キャンパス）	講演会出席	高橋	2008/6/7-8
公立大学協会　第1回FDミニセミナー（公立はこだて未来大学）	講演会出席	高橋	2008/6/11
関西地区FD連絡協議会幹事会（第1回）（京都大学）	会議出席	高橋	2008/6/13
関西地区FD連絡協議会幹事会（第2回）（京都大学）	会議出席	高橋	2008/7/18
日本リメディアル教育学会　第4回全国大会（関東学院大学関内メディアセンター）	講演会出席	高橋	2008/8/11-13
新任教員FD研修（大阪府立大学・羽曳野キャンパス）	講演	高橋、保田	2008/8/22
近畿地区大学教育研究会　第77回研究協議会（大阪大学）	講演会出席	保田	2008/9/6
公立大学協会　第3回FDミニセミナー「大阪市立大学・大阪府立大学連携FDセミナー」（大阪市立大学）	講演（講演題目:大阪府立大学高等教育開発センターの役割について）（高橋）	奥野、山口 高橋、木舩 保田、谷口	2008/10/3
京都大学　第79回公開研究会「学生の成長を促す日本版・単位制度の実質化」	講演会出席	高橋	2008/11/15
第1回関西地区FD連絡協議会シンポジウム「思考し表現する学生を育てる－書くことをどう指導し、評価するか?－」（立命館大学）	シンポジウム出席	高橋	2008/11/29
大学教育学会　2008年度課題研究集会「学生の主体的な学びを広げるために」（岡山大学）	講演会出席	高橋	2008/12/6-7
特色GP成果報告会「成績評価の厳格化と今後の大学教育改革」（同志社大学）	講演会出席	星野	2009/2/23
大学コンソーシアム京都　第14回FDフォーラム「学生が身につけるべき力とは何か－個性ある学士課程教育の創造－」（龍谷大学）	講演会出席	保田	2009/2/28
第2回関西地区FD連絡協議会公開研究会「授業評価からFD評価へ」（京都大学）	講演会出席	星野、保田	2009/3/19
京都大学　第15回大学教育研究フォーラム	講演会出席	高橋、星野 高根、谷口	2009/3/20-21

（宮本）

編集後記

3大学統合後の新大学設立と同時に発足した高等教育開発センター。初代主任の高橋教授は、別の役職との関係で、今年度末をもってセンター主任を退任されます。高橋教授の情熱と実行力、そしてリーダーシップには、所員として学ばせていただくことが多かったように思います。高橋教授には、4月以降も、所員の一人として、センター内には残っていただけることになっています。

授業アンケートの回答率が低いことをはじめ、まだまだ課題の多い府大のFD活動ですが、新年度からは、総合教育研究機構以外の部局に所属の教員にもセンター所員に加わっていただける予定で、センターとして新たなる飛躍の年にしたいと、夢をふくらませています。

（谷口）

大阪府立大学　高等教育開発センター
センターニュース『FORUM』

平成21年3月19日発行

発行者　公立大学法人　大阪府立大学
総合教育研究機構　高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/

印刷所　くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉　木舩 弘一　顧春芳　高根 雅啓　高橋 哲也（主任）　谷口 栄一　星野 聡孝　宮本 健助　保田 卓（副主任）　藤澤 圭子・本吉 紀子（事務担当）

この冊子は1500冊作成し、1冊あたり48円です。